

草原がつなぐ人・自然・文化

全国草原再生ネットワーク

ニュースレター vol.58 (Apr. 2024)



五島のシンボル鬼岳の草原（長崎県五島市／五島市提供）

第14回全国草原サミット・シンポジウム in おたり

進捗状況と小谷村「雨中シヨクの茅場」、文化庁の文化財の森に設定

(澁谷祥充：長野県小谷村)

10月4日のシンポジウムの詳細が決まってきました。基調講演は筑波大学名誉教授で茅葺き文化協会代表理事の安藤邦廣先生の全国の茅場の話を軸に、小谷村在住の茅葺き師の松澤敬夫さんとの対談という展開になります。次に信州大学の井田先生による小谷村牧の入茅場で茅の生育などの研究成果を報告していただきます。

その後、草原の生物多様性、茅刈りと茅葺きの未来、草原の保存活用と安全対策、草原資源を地域への生かし方と次世代へ継承の4つの分科会に分かれて、一般参加者も交え論議を深めます。次世代への継承については小谷中学校の生徒が発表者となり、

草原をいかに守っていくかを、投げかけていってくれることとなり、今から期待が高まります。

シンポジウムの中身も見えてきた中、3月19日に小谷村の「雨中（うちゅう）シヨクの茅場」が文化庁の文化財の森に設定されました。この茅場は、地元的地権者たちによって現在も毎年火入れが行われ、地元の茅葺き師や中学校のスキー部の生徒や保護者たちによって茅刈りが行われています。13haほどのススキやカリヤスの茅場で、秋田市の重要文化財「天徳寺」の本堂の屋根がこの茅場のススキで葺かれました。サミット・シンポジウムを開催する小谷村にとっては、大変明るいニュースとなりました。



茅場の火入れの様子



ススキやカリヤスの茅場

【書籍】『未来に残したい日本の草原 2023』を販売しています

2023年度の「未来に残したい草原の里100選」に選定された、全国14箇所の草原の里を紹介する書籍が発行されました。

販売もしていますので、購入希望の方は、amazon (<https://amzn.asia/d/bm3q0pX>) またはネットワーク事務局にお問い合わせ下さい。



各地からの報告

佐渡島のドンデン高原

(猪股明美：ドンデン高原の自然を考える会／佐渡アウトドアベース)

全国の草原の里のみなさま、はじめまして。わたしたちは日本海に浮かぶ新潟県佐渡島のドンデン高原の自然を考える会です。

佐渡島は沖縄本島に次ぐ大きさを持ち、最高峰の金北山は 1,172m あります。佐渡の山地は火山活動でなく隆起によって生じた離島の山としては異例の高さを誇っています。金北山に連なる標高 900m 前後の大佐渡山地と、標高 600m 前後の小佐渡丘陵が平行に並び立ち、その中間を山からの土砂が埋め立てて肥沃な国中平野を形成しました。この平野部での稲作は量・質ともに県内屈指の米どころとなっています。山々のすそ野が海へとつながっていく佐渡近海は寒ブリ、南蛮エビ、ズワイガニなどの良質な漁場です。また古くから中央政治と結びついた要衝の地であり、佐渡金銀山をはじめとする多くの史跡が残り観光資源にも恵まれています。ドンデン高原はそんな佐渡にあって、大佐渡山地の北東に位置する風光明媚な高原です。

ドンデンという聞きなれない名称は、なだらかな峰を意味する鈍嶺（どんれい）から転じたものと言われています。標高は 900m ほどですが、レンゲツツジやホツツジ、ハクサンシャクナゲを中心とした低木帯と、ザレ場と見晴らしのよいシバ草原が広がっています。冬の間、日本海から吹き付ける強風と極低温の環境、5~6m に達する積雪、そして平安時



大佐渡山地からの眺め

代からの林間放牧の歴史がこのような景観と特有の植生を生み出しました。

ドンデン高原をはじめとした大佐渡山地の稜線沿いの平坦地は、農家の労働力であった牛馬を夏季に逗留させる放牧地として活用されてきました。農耕の主力が機械にとって代わると放牧数は減少の一途をたどり、2010 年代後半に最後の農家が放牧を中止し現在は放牧は行われていません。放牧の減退とともに草原は縮小を続けています。

ドンデン高原のもうひとつの重要な側面は、キャンプ場として長年親しまれてきたことです。ドンデン高原には現在も営業しているドンデン高原ロッジのほかに無人の避難小屋があり、1990 年代までこの



大佐渡山地の稜線を望む



ドンデン高原ロッジ



トレッキングを楽しむ登山者

小屋の周辺には夏になると何百というテントが並び立ち、中学生、高校生、大学生の合宿の場として盛んに活用されていました。現在はトイレや水場が使用できなくなり、このような人々の姿はほとんど見られなくなりましたが、かわりにトレッキングコースとして高い人気を誇っています。ドンデン高原を拠点として大佐渡山地を歩く登山道は、百花繚乱の花のシーズンを中心に多くの人々が歩いています。

施設周辺の草原は、現在はボランティアの草刈りによって維持されています。ドンデンファンクラブ、佐渡山歩ガイドクラブトレッキング協議会、などが中心となって活動しています。これらの団体を取り

まとめる大きな枠組みとして、「ドンデンの自然を考える会」が復活しました。この会は一時期活動を休止していたのですが、今回の草原の里100選を契機に、もう一度人々の笑顔であふれるドンデン高原をよみがえらせるべく活動を再開しています。

会の主な活動はドンデン高原をはじめとする大佐渡稜線の登山道の整備です。その他ドンデン高原ロッジを拠点としたインバウンド向けの高付加価値ツアーの造成、YAMAP と共同で高原の整備活動を行うボランティアツアーなど、新しい客層を呼び込む取り組みも始めています。今後はドンデン高原を再び子供たちの原風景とするための活動を積極的に展開するとともに、期間限定での乗馬体験など牛馬を呼び戻すためのイベントや、整備の際に刈り取るスキを佐渡の茅葺建築に提供したりする活動を模索していきます。

草原の里100選のみなさまの活動がお手本となり刺激となって、景観の維持が主軸であったドンデン高原の活動も、大きく方向転換の気運が高まっています。県の保安林であるため牛馬の放牧を再開することが容易でなく、ボランティアによる景観維持にも活動の限界があります。これからは観光と子供たちの力で、ドンデン高原を持続可能な形で維持していく方向へ、大きく舵を切っていきます。



登山道整備の様子



管理草刈りの合間に

美しい草原景観を活かした地域振興～五島列島の鬼岳～

(唐津博孝：五島市地域振興部文化観光課)

未来に残したい草原の里に選出

九州の最西端に位置し、10の有人島と53の無人島で構成される五島市は、2004（平成16）年8月に1市5町が合併して誕生し、2024年（令和6）に市制施行20周年を迎える。

五島市を含む五島列島最大の島である福江島の東部に位置する「鬼岳」は、その勇壮な名前とは対照的に全体を芝生で覆われて丸みを帯びた山であり、多種多様な草原植物が見られ、その景観に加え地域住民や行政による活用及び保全の取り組みが評価され、2023（令和5）年に「未来に残したい草原の里100選」に選ばれた。

美しい草原景観を有する鬼岳は、約1万8千年前に活動したとされ火山噴火の噴出物で出来た「スコリア丘」であり、山の麓には噴火の際に降り積もったスコリア堆積物の美しい露頭を見ることが出来る場所や、真っ黒な溶岩が広がる溶岩海岸があり、五島市を代表する景勝地となっている。また、西海国立公園（五島列島地域）の特別地域（第2種特別地域）や長崎県の天然記念物（鬼岳火山涙産地）に指定され、その自然や景観の保護などが図られているほか、2022（令和4）年に日本ジオパークに認定された「五島列島（下五島エリア）ジオパーク」の主要な見どころ一つにもなっている。

まるで火山の噴火、3年ぶりの山焼き

この鬼岳では、草原景観の維持や生態系の保護を目的に行われている山焼きが、2024（令和6年）3月2日、3年ぶりに実施された。多くの市民や観光客が見守る中、山を取り囲むように配置された地元の消防団員が、18時に一斉に着火すると、火は徐々



鬼岳の草原景観



山焼きの様子

に山肌を駆け上がり、鬼岳は炎と煙に包まれ、まるで火山が噴火したような姿を見せた。市内各所では、数年に一度しか見ることができないダイナミックな風景をカメラに収めようとする姿が見られた。また、昨年4月にリニューアルした鑑瀬ビジターセンターでは、山焼きの見学場所として通常17時までの開館時間を延長し多くの市民や観光客で賑わいを見せた。

山焼きの翌日、真っ黒な山肌が変わった鬼岳は、春から初夏にかけて新芽が顔出しはじめ、鮮やかな緑の景観を取り戻す。

地域に賑わいをもたらす五島のシンボル

鬼岳には、九州でも有数の大型望遠鏡がある天文台も整備されており、星空観察の場所としても人気がある。年間を通して実施されている「鬼岳星空ナイトツアー」では、鬼岳から星々のきらめきを眺める贅沢なひとときを体験することができる。また、五島に古くから伝わる工芸品「ばらもん凧」の凧揚げ



鑑瀬ビジターセンター

大会が毎年 5 月に開催されている。2022 年度後期の NHK 連続テレビ小説「舞いあがれ！」でも話題になったこの凧は、鬼に兜を噛みつかれた武者の姿が表現されている。このように鬼岳は、景観の美しさもさることながら、様々なイベントの会場としても活用されており、五島市の地域振興を支えている。

鬼岳の中腹には約 260 品種、2,800 本の椿が植えられている五島椿園が整備されている。椿は、冬場

の強い北西風から畑を守る防風林としての役目や、「かたし」と呼ばれる椿の実から抽出した油は椿油として古くから利用されてきた。近年では、化粧品やお酒、木工品の原材料としても活用されており、五島の人々の暮らしに深く関わっている。2025（令和 7）年 2 月には、全国の椿愛好家が集い、椿による交流や地域振興を行う「全国椿サミット」が五島市で開催されることが決まっている。



五島の夜を彩る星空



五島の名産のひとつ、椿

阿蘇草原再生事業におけるトピック～野焼き専門人材の育成、保安林における課題解決について～

（山下淳一：環境省阿蘇くじゅう国立公園管理事務所・長野智宏：南阿蘇村農政課）

1. 阿蘇草原を取り巻く状況

阿蘇の草原は、野草を主体とする日本最大規模の草原です（牧野面積 21,998ha、野草地 14,850ha（いずれも令和 3 年度時点））。しかしながら、農畜産業や生活上で野草を利用しなくなった人が増え、地域社会で続けてきた草原の利用・維持管理のこれまでのシステムがうまく機能しなくなりました。その結果、草原面積は、過去の約 100 年間で半分以下に、直近 30 年を見ても 1/4 近く（面積にして約 7,500ha）減少しました。さらに、平成 28 年度に熊本県が実施した「阿蘇草原維持再生基礎調査」（以下、「熊本県の調査」という。）では「今後どのぐらい野焼き・輪地切り（防火帯切り）が継続できるか？」との問いに対して、「10 年以上継続可能」と答えた牧野組合がカバーする草原面積は、全体の約 4 割となりました（図 1）。さらに、30 年後の地域の人口が約 2/3 に、高齢化率は過半数を超えると予測されており、



火引きの現地研修

近い将来、草原存続が危機的であることが、改めて浮き彫りになっています（図 2）。実際に野焼き面積も、平成 23 年から令和 3 年にかけては 467ha 減少しています。

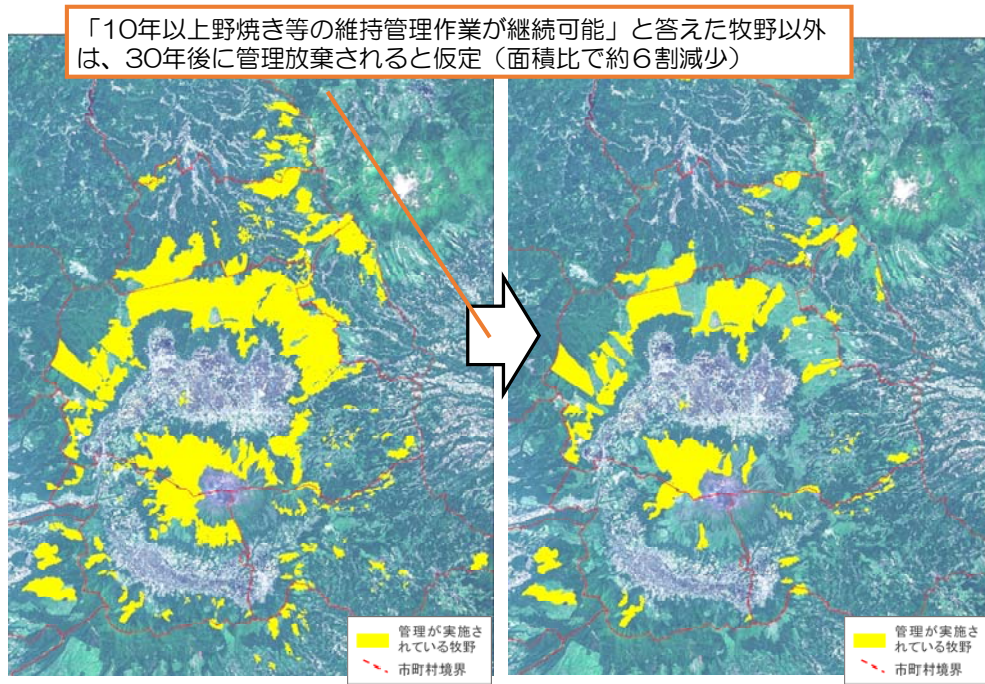


図1 「10年以上継続可能」と回答のあった牧野

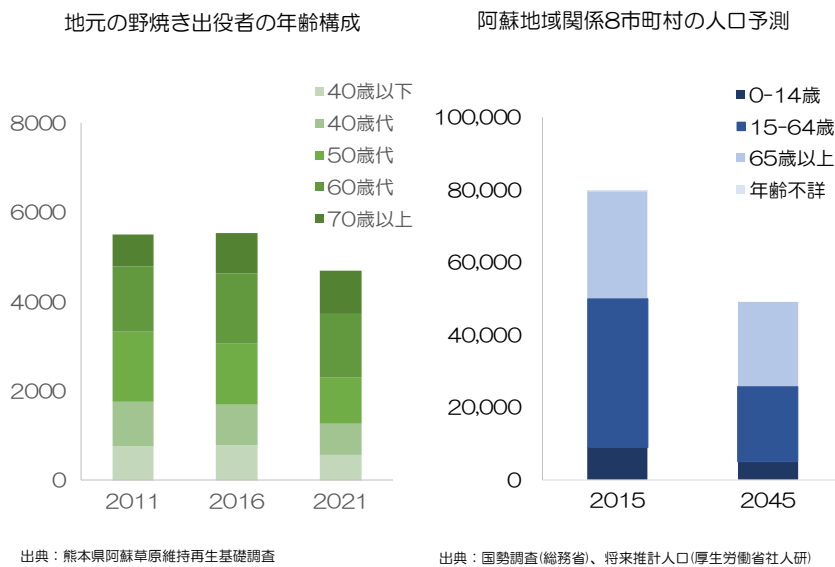


図2 野焼き出役者の年齢構成など

2. 野焼き専門人材の育成

(1) 取組経緯

阿蘇地域では、全体の約4割の牧野において、野焼き支援ボランティアが活動しており、輪地切りや火消しをサポートしていますが、安全上のリスクから、火引き（火をつける作業）はボランティアの活動対象にはなっていません。草原の維持管理作業の人手不足が深刻化していますが、とりわけ火引き人材には、地形の熟知や当日の気象条件に応じた臨機応変な対応など十分な経験が求められ、育成には時

間がかかります。

そうした背景を踏まえ、熊本県では平成25年度から、「後継者育成支援事業」を実施しています。これは、各牧野組合・地区内の次世代の人材を、火引きの後継者として育成しようという取り組みで、1) 安全講習（座学）、2) 実習用に確保したフィールドでの火引きの現地研修、3) 各牧野組合等で行われる野焼き作業への参加という内容のカリキュラムとなっています。年間5牧野組合程度が継続して本事業を活用していることから、地元のニーズに合致

した事業であることが分かります。

一方で、上述の通り、そもそも地域社会の人口自体が少なくなっています。そのため、育成する人材の候補そのものがないという牧野組合や地区が増えています。事実、熊本県の調査においても、野焼き継続に必要なこととして、「火引き要員など専門家集団の協力が必要」と答えた牧野組合が年々増えてきており、令和3年度の調査では、13 牧野（全体の約10%）がそれを望んでいることが明らかになっています（図3）。

そこで、環境省では、令和4年度に「野焼き専門家集団育成事業」を開始しました。環境省事業のプログラムは、図4の通りです。研修の内容は、概ね熊本県の事業と同じですが、それに加えて、「地域外からの候補人材を確保する」というプロセスが必要不可欠になります。初年度の事業では、候補人材を確保するために、経験豊富な野焼き支援ボランティアリーダーに対して、ボランティアとは別に協力を募った他、南阿蘇村において、村内在住の関心を持つ人に対して声をかけ、最終的に2名の候補人材の育成を行いました。

初年度の事業を進める中で浮かび上がってきた課題は、「実装に向けた仕組みづくり」の必要性でした。火引きは安全上のリスクを伴う作業であり、火引きの専門人材の育成を持続可能な取り組みにしていくためには「事故などがあった時の責任の所在はどうするのか」「こういった形で火引き人材と牧野組合・地区をどのようにマッチングさせていくのか」「野焼きを仕事（有償）としてお願いしていくための予算確保をどうするか」などの課題をクリアしていく必要があることを実感しました。

（2）南阿蘇村「野焼きプロ人材認定制度」の開始

令和5年度も引き続き、南阿蘇村と環境省で連携して事業を実施することとなり、南阿蘇村から「野焼きプロ人材認定制度」の提案を行いました。環境省としては、前年度に浮かび上がった課題は関係自

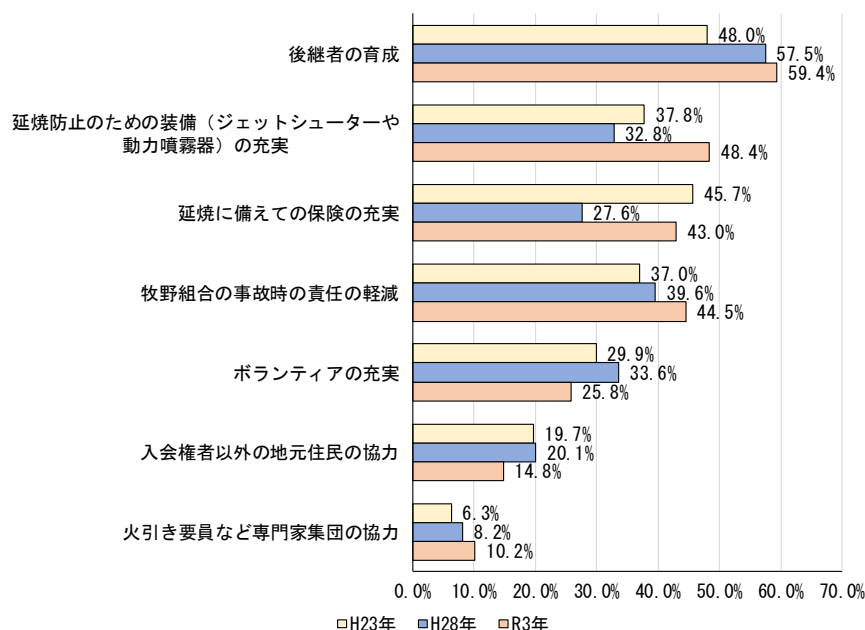


図3 野焼き継続のため牧野組合が希望する内容



図4 野焼き専門家集団育成事業のプログラム

治体の尽力なしでは解決できないと考えていたため、自治体からの提案は驚きとともに、本当に心強く感じました。

南阿蘇村では、平成28年の熊本地震の影響で輪地切りが困難な箇所が多数発生し、7 牧野組合・地区で野焼きが休止されました。そのため、村内で実施される野焼きの「火付け責任者」を村長が務めたり、「阿蘇の景観と地下水を守るプロジェクト」として企業版ふるさと納税を活用した寄付を募ったりと、これまでに草原保全のための様々な施策を展開し、野焼き再開の後押しを進めてきました。その結果、一部野焼きを再開した牧野組合・地区もあります。しかし、休止した野焼きの再開やこれまでどおりの野焼き継続においては、野焼き従事者の高齢化、火引きの後継者不足という課題が依然としてあります。数年後には草原維持が困難になるという事態も予測される中、牧野組合・地区の一員として「野焼きプロ人材」を育成する今回の制度化に新たに取り組む

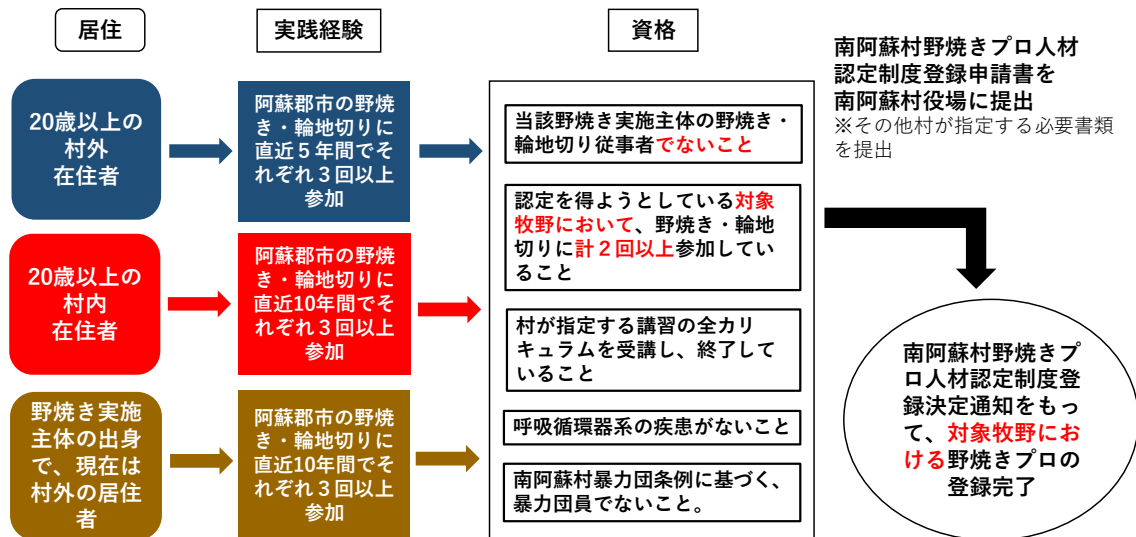


図5 南阿蘇村野焼きプロ人材登録の流れ

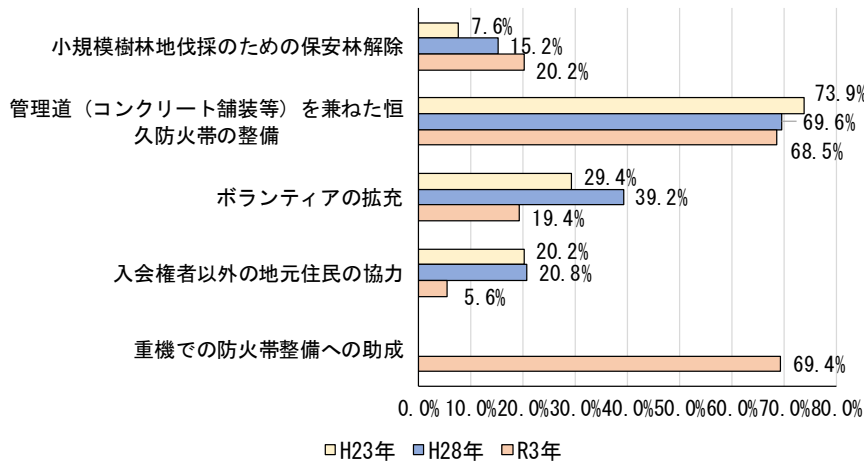


図6 野焼き支援の取り組みの推移

ことにしました。

制度設計に当たっては、1) 一定の経験値を求める必要がある一方で、2) ある程度の人数を確保して育成する必要もあることから、(公財)阿蘇グリーンストックの知見も借りながら、図5の通りの体制・枠組みで開始することにしました。初年度は、本制度に応募してきた人材12名が、2月10日に行われた研修に参加し、第1弾で、今年度中に3名が「プロ人材」として認定される予定です。

3. 保安林における課題解決

令和5年度は、阿蘇の草原再生にとってもう1つ大きなトピックがありました。それは、熊本県の調査でも、輪地切り継続のために望むこととして年々求める声が大きくなっている「小規模樹林地伐採の

ための保安林解除」(図6)が進んだことです。これも、地域社会の人口減少や高齢化と大きく関係していますが、樹林地に隣接する輪地切り作業の負担が相対的に増しており、保安林であっても、その一部を解除・伐採して、輪地切りの負担軽減を図れないかというものです。

熊本県と調整したところ、最終的に、環境省が所管する自然公園法の国立公園事業が、保安林解除の要件である「公益上の理由」に該当すること、阿蘇地域では国立公園事業に「阿蘇草原自然再生施設」が位置づけられているため、市町村が小規模樹林帯の伐採や恒久防火帯の整備などを、国立公園事業として実施する場合には、保安林解除について検討可能であること、などが整理されました(図7)。

具体的な解除に向けては、「治山施設をはじめとし

- 輪地切りの負担や野焼きの延焼リスクの軽減のため、小規模樹林帯伐採や恒久防火帯整備を行うのに必要な保安林の一部解除を可能にするもの。
- 草原再生の取組を国立公園の自然再生施設事業に位置付けることで、保安林解除について検討可能と整理。
- 現在、南阿蘇村にて、モデル的な保安林解除の取組を実施中。

<解除候補地のイメージ>

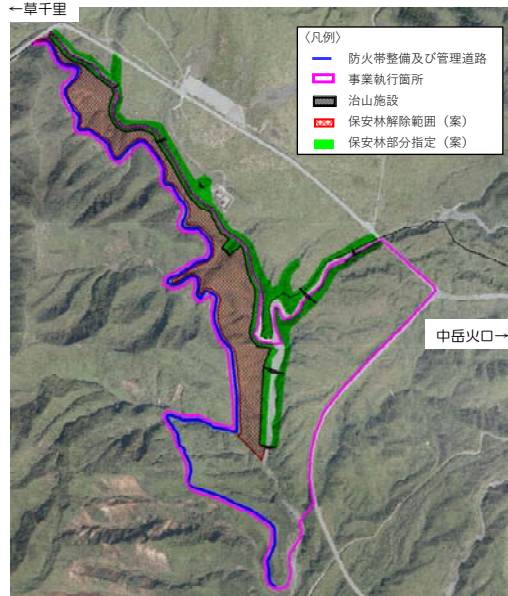
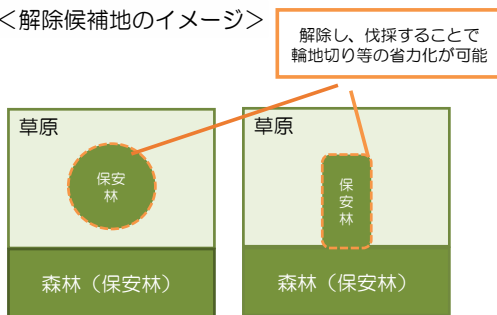


図7 保安林解除のモデル的な取り組み

た防災機能の維持が必要」「代替施設（保安林の機能を代替する施設が設置されること）の検討が必要」「解除面積の算出が必要」など、様々な条件をクリアする必要がありますが、南阿蘇村に所在する牧野組合を対象に、令和4年度以降、測量や各種の手続きを進め、令和6年春には保安林を一部解除したエリアにおいて、野焼き再開による草原の再生が実現

しました。

「土砂流出防備」や「水源涵養」など、阿蘇地域の保安林は、地域にとっても重要な役割を果たしていますが、今後も、その役割を大きく損なわない形で、地元の草原維持を支援していければと考えています。

草原をめぐる動き（2024年4月～2024年7月）

- 4/2 扇山火まつり（場所：大分県別府市扇山、連絡先：別府八湯まつり実行委員会）
- 4/6 自然観察交流会（場所：山梨県山梨市牧丘町乙女高原、連絡先：乙女高原ファンクラブ）
- 4/7 深入山の山焼き（広島県安芸太田町、連絡先：安芸太田町産業観光課）
- 4/13 寒風山山焼き（場所：秋田県男鹿市、連絡先：男鹿市観光課）
- 4/13 千町原保全活動（場所：広島県山県郡北広島町千町原、連絡先：西中国山地自然史研究会）
- 4/20 雲月山の山焼き（場所：広島県北広島町 連絡先：西中国山地自然史研究会）
- 4/27-28 上ノ原茅場の野焼き（場所：群馬県みなかみ町、連絡先：森林塾青水）
- 5/3 山焼き後の雲月山植物観察（場所：広島県北広

- 島町 連絡先：西中国山地自然史研究会）
- 5/5 サクラソウのモニタリング（場所：広島県北広島町 連絡先：西中国山地自然史研究会）
- 5/6 自然観察会「サクラソウと蒜山の春」（場所：岡山県真庭市、連絡先：津黒いきものふれあいの里）
- 5月上旬 小清水原生花園火入れ（野焼き）（場所：北海道小清水町、連絡先：小清水原生花園風景回復対策協議会・小清水町産業課商工観光係）
- 5月上旬 藤生鉢山の山焼き（場所：福島県南会津町）
- 5/12 乙女高原の遊歩道づくり（場所：山梨県山梨市牧丘町乙女高原、連絡先：乙女高原ファンクラブ）
- 5/12 春の自然観察会（場所：山梨県山梨市牧丘町乙女高原、連絡先：乙女高原ファンクラブ）
- 5/19 タチスミレを観察しよう（場所：茨城県坂東市、連絡先：ミュージアムパーク茨城県自然博物館）

- 5/26 乙女高原案内人養成講座 (6/9,7/28、場所：山梨県山梨市牧丘町乙女高原、連絡先：乙女高原ファンクラブ)
- 6/1 黄色いスマイレハイキング (場所：山梨県山梨市牧丘町乙女高原、連絡先：乙女高原ファンクラブ)
- 6/15 夏の草原保全 花咲く草原の夏草刈り (場所：岡山県真庭市、連絡先：津黒いきものふれあいの里)
- 6/30 マルハナバチ調べ隊 (場所：山梨県山梨市牧丘町乙女高原、連絡先：乙女高原ファンクラブ)
- 6/30 千町原の植物観察 (場所：広島県北広島町 連絡先：西中国山地自然史研究会)
- 7/7 谷地坊主の観察会 (場所：山梨県山梨市牧丘町

- 乙女高原、連絡先：乙女高原ファンクラブ)
 - 7/14 津黒高原湿原で生き物観察 (場所：岡山県真庭市、連絡先：津黒いきものふれあいの里)
 - 7月中旬 防火帯津黒高原湿原で生き物観察刈り (場所：群馬県みなかみ町、連絡先：森林塾青水)
 - 7/20 夏のボランティアガイド① (7/21,27,28、場所：山梨県山梨市牧丘町乙女高原、連絡先：乙女高原ファンクラブ)
 - 7/20 夏休み前の遊歩道の草刈り (場所：山梨県山梨市牧丘町乙女高原、連絡先：乙女高原ファンクラブ)
- ※予定が変更になる場合があります。上記以外の情報もホームページで随時公開しています。

■乙女高原案内人養成講座 開催

山梨県の乙女高原では、第5期となる乙女高原案内人養成講座が開催されます。

詳細は <http://fruits.jp/~otomefc/> をご覧ください。

■「聞き書き 秋吉台と生きる」発行

秋吉台の山焼き、草原の利用などについて、24組29人から聞き書きをした内容が、書籍として発行されました。

伝えることで守ろう、乙女高原の自然 定員 30名
第V期 乙女高原案内人養成講座
日程：2024年
5月26日(日)
6月9日(日)
7月28日(日)

乙女高原に行ったら、遊歩道を見て、道の上から草原を見下ろしてみよう。夏草刈りの大仕事の日を体験してみよう。乙女高原ファンクラブ主催。案内人養成講座。

春の遊歩道づくり、秋の草刈り作業を行いながら、キジムシ、ササアザミ、マルハナバチ、ヒメトモチヂムシなど、例を見てもない生き物がいます。草木観察会、虫かき会。

主催：乙女高原ファンクラブ 後援：山梨県・山梨市・山梨市教育委員会

1日目 5月26日(日) 9:30-18:00
山梨市市民会館 (山梨県民力 1400)

開催の趣意 乙女高原案内人の目的は、人びとが乙女高原の自然に親しみ、学ぶきっかけを与え、手助けすることを通して、乙女高原ファンクラブの底辺を広げることです。案内人を目的する方に、乙女高原の知識や自然解説の技能などを身につけていただくために、養成講座を開催します。

受講対象者 定員 30名
1. 満18歳以上で、乙女高原での案内活動の必要性を認識し、自分のできる範囲で活動に参加したい方
2. 原則として3日間すべての養成講座を受講できる方
(都合で一部受講できない方はご相談ください)
3. 乙女高原ファンクラブ会員(会員でない方は申込みの際にご入会ください。入会金・年会費とも無料。2024年1月現在、入会者は830人です)

受講料 1,000円 (3日分の合計。教材費、保険料等)
別途テキストが必要ですが、養成講座の際に販売します(予定価格1,500円)

講師 山梨県立自然史博物館 井上敬子 (乙女高原ファンクラブ代表世話人)、北川憲仁 (山梨県立大学教授)、小松信博 (山梨県立農林大学校教授)、古明徳孝吉 (改正郷土文化館館長)、鈴木純三 (乙女高原案内人)、時田 憲 (NACS-J 自然観察指導員養成講座)、伏見 勝 (NACS-J 自然観察指導員養成講座)

申し込み方法
1. 右フォームより申し込みください。フォームの読み取りが難しい方は事務局までお問い合わせください。申し込み書をお送りします。
2. しめ切りは4月30日です。申込み多数の場合は抽選とします。
3. 後日、申し込みされた方に、詳しい案内をお送りします。

問い合わせ・申し込み先
乙女高原ファンクラブ事務局
〒404-0013 山梨県北佐野平1110-3
TEL: 090-7249-4625
Email: otomefc@fruits.jp
URL: <http://fruits.jp/~otomefc/>

聞き書き
秋吉台と生きる
29人が語る
「草原と共にある暮らし」

鮮やかによみがえる父祖の人生
秋吉台が心の故郷になる！

29人が語る「草原と共にある暮らし」

244ページ 1,980円(税込)
Mine秋吉台ジオパーク推進協議会

全国草原再生ネットワーク ニュースレター vol. 57 2024年4月号

一般社団法人全国草原再生ネットワーク事務局
〒694-0064 島根県大田市大田町大田イ 378-14
大田市ゲストハウス雪見院内 Tel. 0854-82-2727 Fax. 0854-86-8899

【編集後記】今年10月に長野県小谷村で開催される全国草原サミット・シンポジウムは、基調講演や分科会の内容が決まりました。多くの方が参加され、草原に携わる人たちの交流の場になることを期待しています。